福井県文書館講演

若狭武田氏の興亡一三〇年

河村　昭一*

はじめに　－若狭以前の武田氏－
１．守護大名武田氏
（１）若狭支配の基盤整備
（２）信賢期の武田氏の政治的立ち位置
（３）応仁の乱と武田氏
（４）明応の政変と武田氏
（５）元信の栄達と在地での矛盾
２．戦国大名武田氏
（１）永正の丹後侵攻
（２）細川京兆家・将軍権力の分裂と武田氏
（３）逸見氏の謀叛と丹後再侵攻
（４）武田氏の戦国大名化
（５）粟屋氏の強勢と元隆の失脚
（６）信豊の施策
（７）武田氏の衰亡
おわりに　－武田氏はなぜ強力な戦国大名に成長できなかったのか－

はじめに　－若狭以前の武田氏－

みなさん、こんにちは。ただいまご紹介いただきました河村でございます。ご紹介にありましたように旧清水町の甑谷（こしきだに）というところで生まれまして、高校まではこちらにおりました。それから広島大学に進んで、大学では越前のことを勉強していたんですけれども、あるとき、ひょんなことから武田氏と出会うことになりました。いまから45年前です。広島に『芸備地方史研究』という地方史研究の雑誌がありまして、そこに「安芸武田氏関係文書目録」[1] という史料紹介の原稿を書きました。それが武田氏との最初の出会いです。

こちらの写真をご覧ください（**写真1**）。これは広島の街から見える山で、その名も武田山といいます。この山に金山（かなやま）城という城があって、そこを本拠として安芸国の重要なところを押さえていた、これが安芸武田氏です。

この山の麓に公民館[2] がありまして、あるときその公民館の方から「武田氏の勉強をしたいんだ

＊兵庫教育大学名誉教授

写真１　金山城址（撮影：講演者）

けど適当なテキストがないので書いてくれないか」という依頼を受けました。それで書いたのが、『郷土資料　安芸武田氏』[3] という冊子です。これが私のデビュー作になりましたので、武田氏との縁の深さを感じております。

お手元の系図をご覧ください（**図１**）。今日お話しする若狭武田氏というのは、白抜きの①から⑧までです。一番左の列が安芸武田氏で、戦国時代の安芸武田氏は若狭武田氏の分家筋にあたります。①の信栄（のぶひで）から信繁、信守とさかのぼっていきまして、信武からあとが南北朝時代になります。有名な武田信玄は甲斐武田氏になりますので、氏信の横にいる信成の系統です。南北朝時代、室町時代は甲斐武田氏と安芸武田氏という二つの家があって、そこに突然、若狭との関係ができて若狭武田氏が惣領家、安芸武田氏が分家になる。それで戦国時代は甲斐と若狭と安芸という三つの家があった、ちょっとややこしいですけれども、このような関係になります。

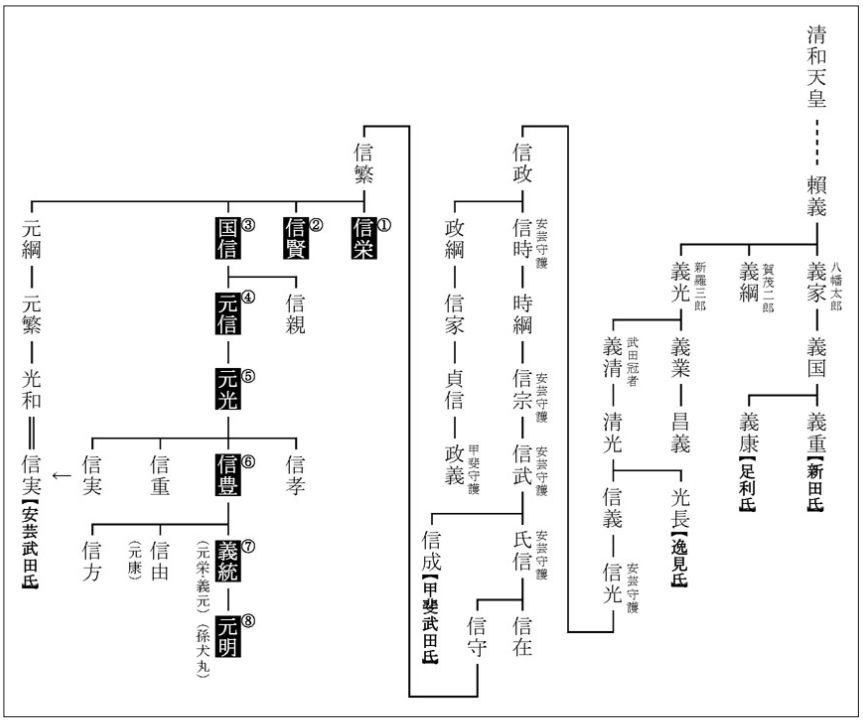

図１　武田氏略系図（①～⑧の太白抜きは若狭武田氏歴代当主）

ちなみに今日のお話は、昨年の 12 月に出しました『若狭武田氏と家臣団』[4] という本の前半分にあたります。90 分ですべてのことはお話しできませんので、細かいところはこちらの本で見直していただければと思います。今日は限られた時間ですので、ところどころ省略しながら進めさせていただきます。

はじめに、若狭にやってくる以前の武田氏について簡単にお話しします。先ほど出てきました信武の子氏信が、応安 4 年（1371）に突然、幕府から安芸守護職を解任されます。それで武田氏は失脚するのかというとそうではなくて、郡をもらいます。安芸国には郡が八つあります。その中から、最初に安南（あなん）郡をもらって、次に佐東郡、それから山県郡をもらって安南・佐東・山県という 3 郡の郡主になります。「郡主」という言葉は聞き慣れないかもしれません。昔は「分郡守護」という言

い方をしていましたが、正しくないのではないかという説が出てきまして、当時の史料に見える「郡主」という言葉が使われるようになりました。最終的に安北郡ももらいまして、室町時代の武田氏は、あわせて四つの郡を支配していました。

1．守護大名武田氏

（1）若狭支配の基盤整備

応安4年（1371）に安芸の守護職を失った武田氏は、永享12年（1440）の5月に信栄が足利将軍義教の命で一色義貫をだまし討ちにして、義貫の遺跡の中から若狭の守護職をもらいます。「信栄」はいろんな読み方ができますが、ここでは「のぶひで」と読んでおきます。

こうして待望の一国守護に返り咲いた信栄は、張り切って若狭に下ります。守護職をもらった翌月の6月29日にさっそく若狭に下るのですが、それから1か月も経たないうちにある事件を起こします。7月17日に小浜で人を殺してしまうんです。相手は一般人で、おそらく商人だと思います。そして23日、事件から1週間も経たないうちに突然、死んでしまいます。まだ28歳という若さでした。この突然の死には、どうも身体的な問題だけじゃなくて精神的な問題もあったようです。資料をご覧ください（**資料1**）。

資料1『師郷記』永享12年7月23日条

若狭守護武田、国に於いて死去。下向の後則ち病気□□□邪気等これあり。御医師を下され、□□□□、又山門（比叡山:講演者注、以下同じ）の験者（加持祈祷で物の怪を退散させる行者）を下さる。邪気の様希代の事と云々。下向の時、先に十七日と云々小浜に於いて富裕の地下人（庶民）を誅し了んぬ。希代の所行と云々。（資料中のルビは講演者による。以下同じ）

最初の所に、若狭守護武田が国で死去したとあります。若狭に下ったあとすぐに病気になった。それが体の病じゃなくて「邪気等これあり」とあります。京都から医者が下され、比叡山から験者が下されたけど、亡くなってしまった。「邪気の様希代の事」と言っています。ついこの間まで若狭を支配していた一色が殺されて、殺したその本人が若狭にやってきたわけですから、現地では非常に大きな反発がある。しかも若い信栄としては、一色をだまし討ちにして殺してしまった、それで思い悩んでいたということもあったのではないかと思います。ともかく、普通の死に方ではなかったようです。

亡くなった信栄は子供がいなかったようで、七つ下の弟の信賢という人が跡を継ぎます。急に兄が死んで跡を継ぐことになった信賢には、いくつかの難題が待ち受けていました。先ほどお話ししたように、ついこの間まで若狭を支配していた一色が殺されて、殺した本人の武田がやってきた。一色の家臣は牢人になっていますので、当然、ものすごい反発があるわけです。牢人が武田に対して反乱を企てる、牢人一揆です。百姓の徳政一揆もありまして、若狭では少なくとも4回の一揆があったことが確認できます。これが難題の一つです。

もう一つは、一色氏の影響力です。特に小浜にはいつまでも一色の影響力が残っていて、なか

なか武田の支配下に入らないんです。寛正４年（1463）でもまだ、小浜の住人、これはおそらく商人だと思いますが、それがまだ一色の家臣でいる。寛正６年には、一色の重臣が小浜の代官を務めている。つまり、武田は法的にも支配権がないんですね。牢人や百姓がやいのやいのするし、若狭でもっとも重要な小浜にいつまでも一色の影響力が根強く残っている。信賢は非常に苦労したと思います。

それに対して信賢はどういう策を講じたかというと、一つは武力による鎮圧です。力ずくで抑えようとしたんですね。康正元年（1455）には信賢が弟の国信と一緒に若狭に下って、そのまま１年と８か月も留まっています。当時の守護というのは原則、京都にいなければいけませんでした。１年８か月も京都を留守にして国元にいるというのは、非常に異例のことです。それだけ若狭が大変な状況だった、そのことの反映でしょう。

もう一つは、荘園政策です。若狭の守護になったので、家臣は安芸から若狭に移ってきます。でも、移ったはいいけど若狭にはなんの足場もありません。なんとか足場をつくってやらないといけないということで、武田は幕府から荘園の代官職をもらって、それを家臣に分けてやろうと考えます。それが文安元年（1444）、若狭に移ってから３年が経っていますが、ようやく幕府に申請して認められることになります。でもこれは無茶な話で、荘園領主には「希代の成敗、無道の至極乎」（『康富記』文安元年７月19日条）、つまり、むちゃくちゃな政治だと批判されています。

武田としては、荘園の代官職を家臣に与えて足がかりをつくってやりたかったんだと思いますが、その武田の荘園に対する態度が、こちらの資料に象徴的に表れていると思います（**資料２**）。

資料２「東寺百合文書」ぬ函106[5)]

畏み申し上げ候。（中略）今月十日上下宮御神事にて候。九日の晩景（夕方）に使をあまた付け候て（大勢派遣して）、堅く催促候。（中略）この人夫を出し候はずば、本所御百姓一人も守護方の地を踏ます候まじき由評定候と承り候間（守護方の地に足を踏み入れさせまいと決議したと聞いたので）、小浜へ出入り仕り候はでは叶わぬ在所にて候。（中略）度々申し上げ候如く、当代のあいしらい、先々に相替わり候（武田氏の代になって先の一色氏のときとは百姓に対する態度が変わった）。

（中略）万事御扶持を憑み奉り候。恐惶謹言。

九月廿七日　　太良庄　御百姓等上

進上　御政所殿

これは太良庄の百姓の申状で、武田が「今月10日に上下宮（若狭彦神社・若狭姫神社）の神事があるので人夫役を出せ」と言ってきた。しかも、「出さないんだったら守護が支配する土地には一歩も足を踏み入れさせない」、つまり「言うことを聞かんと許さんぞ」と脅しをかけてくるわけです。こういうやり方に対して、百姓は「当代のあいしらい、先々に相替わり候」、武田の時代になって変わってしまった、前の一色の時代にはこんなことはなかった、と言っています。これが百姓の肌

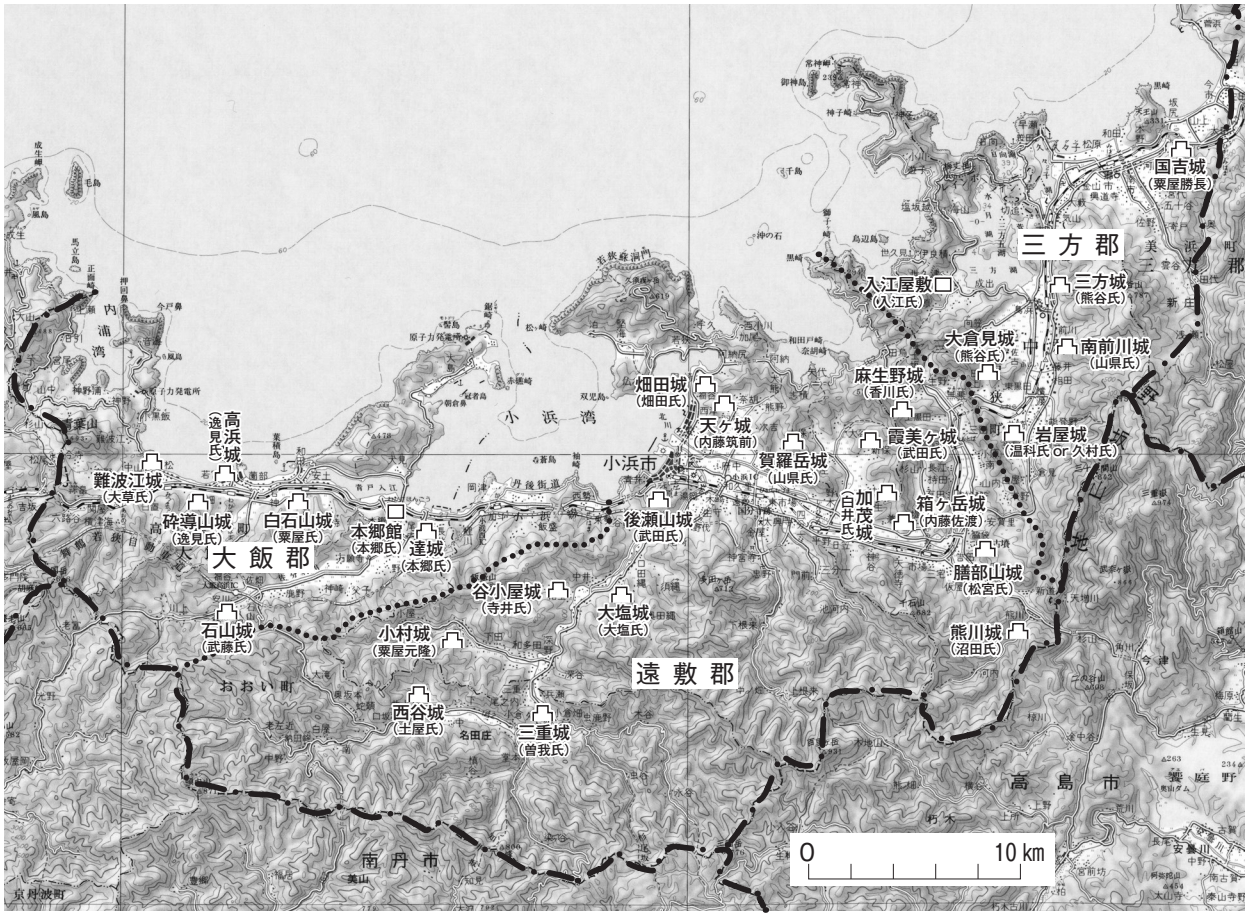

図２　若狭の主要城館

（国土地理院発行「1:200,000 地勢図　宮津」（昭和 58 年編集･平成 16 年修正･平成 23 年要部修正版）をもとに作成）

感覚でしょう。

武田氏の家臣は、大飯郡、三方郡、遠敷郡の三つの郡に配置されていました（**図２**）。大飯郡に逸見氏・武藤氏、三方郡に熊谷氏・温科（ぬくしな）氏・久村（くむら）氏・入江氏、遠敷郡に内藤氏・粟屋氏・山県氏・白井氏・香川氏、これらはみんな安芸からやってきた武士です。若狭の武士は一人もいません（大飯郡の大草氏・本郷氏、遠敷郡の沼田氏は将軍直属の奉公衆）。

家臣による支配機構は**図３**のような形になります。先ほどお話ししたように、当時の守護は京都にいなければなりませんでしたので、京都にも奉行がいます。武田の場合は、主席奉行といったらいいでしょうか、奉行のトップの執権という立場の人がいたようです。これは粟屋氏でした。国元には守護代や郡司、小浜代官といった役職があったようです。郡司は三方郡と大飯郡に置いていたことがわかっています。三方郡の郡司は代々、熊谷氏が任命されていて、熊谷氏以外の人が三方郡の郡司

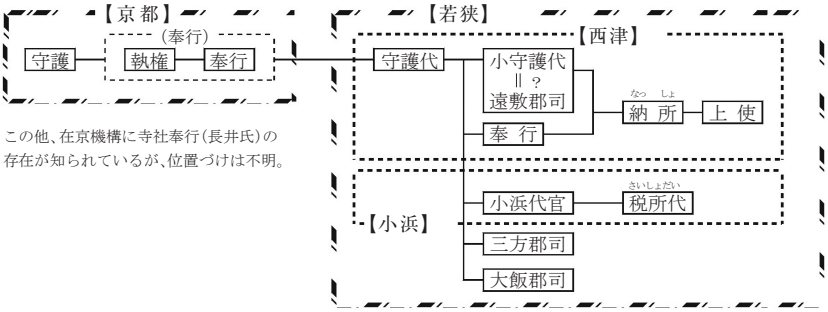

図３　信賢・国信期（1440 ～ 1490 頃）の支配機構

になることはなかったようです。大飯郡の郡司は不明ですが、おそらく逸見氏だと思います。

小浜は真ん中に川が流れていて、川の北のほうが西津です。一色の時代は西津に守護所がありました。役所ですね。武田も最初は一色の守護所をそのまま利用していたと思います。図では筆がすべって小浜にしてしまいましたが、小浜代官はもしかすると、最初は西津にいたかもしれません。これらの役職に就いたのは粟屋、逸見、内藤、熊谷、山県、この５氏だけです。限られた家臣が主要なポストを占めていたというわけです。

（２）信賢期の武田氏の政治的立ち位置

信賢期の武田氏の政治的な立ち位置を図で表すと、このような関係になります（**図4**）。これは応仁の乱が始まる直前の状況です。白い四角と黒塗りの四角は敵味方という意味で、真ん中に黒塗りの武田がいて、その左に一色がいます。武田と一色は殺したほうと殺されたほうですから、仲良くできるはずがありません。敵対関係です。右の大内は周防の大名です。安芸の武田とは隣同士になりますが、大内が安芸に攻め込んでくるので、ここも敵対関係です。

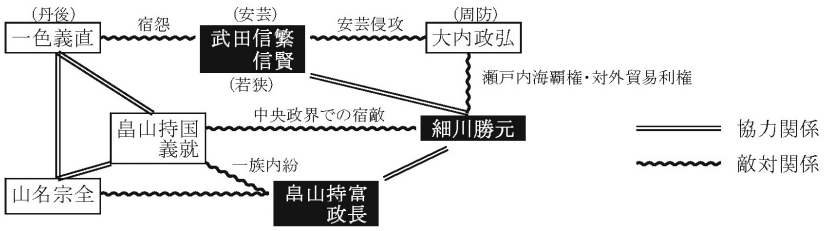

図４　武田信繁・信賢を巡る大名の政治的関係

大内は、細川とも敵対関係にありました。なぜかといいますと、瀬戸内海の西のほう、周防から長門、九州の豊前・筑前は大内の分国です。安芸も沿岸部は大内の息がかかっています。瀬戸内海の東のほう、摂津とか和泉、淡路、讃岐、阿波は細川の分国です。つまり、大内と細川は瀬戸内海の西と東でライバル関係なんですね。さらに大内は博多、細川は堺を抱えています。両方とも当時の日本を代表する貿易港ですので、対外貿易でもライバル関係になります。

大内と敵対関係にある細川は、東に出張ってくる大内を防いでくれる、安芸でなんとか食い止めてくれる、そう期待して武田を応援するんですね。そういう利害関係がありました。あとは、一色は山名と仲が良いとか、畠山は内輪もめをして一族で敵味方になっているとか、このようなややこしい関係で、応仁の乱に突入します。

（３）応仁の乱と武田氏

応仁の乱では、武田は細川方ですから東軍です。一色は西軍ですね。**表１**は応仁の乱における武田軍の戦績をまとめたものです。これによりますと、応仁元年（1467）から文明２年（1470）までの間で武田は３勝11敗２引き

表１　応仁の乱における武田軍の主な戦績

年　月　日	事　　項	勝敗
応仁元年(1467)　5.　21	これまでに小浜近辺の一色勢力を駆逐し、この日、若狭から上洛。	○
5.　26	実相院、ついで一色義直邸を攻撃して占拠。	○
6.　13	被官白井備中討死。	●
6.　14	二条に下る途中、朝倉勢の待ち伏せにあい80人ほど打ち取られる。	●
7.　3	斯波義廉邸を攻めるも、利あらず退却。	●
7.　11	斯波義廉邸を攻めるも、朝倉勢のために6、7人討たれる。	●
9.　1	等持寺に畠山義就を攻めて反撃され、退却の途中で討たれて三宝院に駆け込む。	●
9.　16	これより先、畠山義就勢と戦い、24人首を取られる。	●
10.　2	信賢、相国寺勝定院の陣所を畠山義就勢に攻められ、退却。	●
10.　4	国信、相国寺惣門を守るも、ついに破られる。	●
２年(1468)　3.　21	赤松・武田勢の陣取る醍醐・山科を朝倉勢に攻められ、退却。	●
8.　6	被官逸見勢、東山に出張。	△
8.　14	逸見勢、山科郷・勧修寺から深草を攻める。	△
12.　19	西軍に山科を攻められるも、山科郷民と協力して退ける。	○
文明元年(1469)　8.　3	武田勢の逸見・粟屋ら、丹後に攻め入るも、一色被官延永氏に敗れる。	●
２年(1470)　7.　19	勧修寺に籠もるも、西軍に攻められ、逸見繁経を始め200人が討たれる。	●

分け。大負けをしています。朝倉にやられることが多かったようです。

こちらの肖像画をご覧ください（**写真２**）。これは武田元光の肖像画です。絵の上のほうに字が書いてありますね。これは賛（さん）といって、普通は禅宗のお坊さんに書いてもらいます。これを自分で書くと自画自賛になります。信賢の父信繁の分は、絵は残っておりませんが、賛が記録として残っておりまして、そこには「応仁京師（けいし）之乱（中略）百戦百勝して名を天下に振るう」（「宝泉院殿豆州前司日山大禅定門讃並序」）[6] とあります。これは天陰龍沢（てんいんりゅうたく）という京都五山の有名なお坊さんが書いた信賢・国信兄弟への賛辞なのですが、でたらめですね。お坊さんも本当のことを書くわけにはいきませんので、大嘘になりますけれども、こういうふうに書くんですね。

写真２　武田元光画像（犬追物検見之図）
（小浜市発心寺蔵、福井県立若狭歴史博物館画像提供）

文明元年（1469）の８月には、逸見や粟屋が丹後に攻め入っています（**表１**）。武田は東軍が西軍の一色から取り上げた丹後守護職をもらうのですが、西軍の一色がだんだん東軍のほうに寄ってきて、文明６年に降伏します。それで丹後の守護職は一色に戻されることになります。武田の丹後守護職は６年でまた一色に戻ってしまった。これは後々関係してきますので、おぼえていてください。

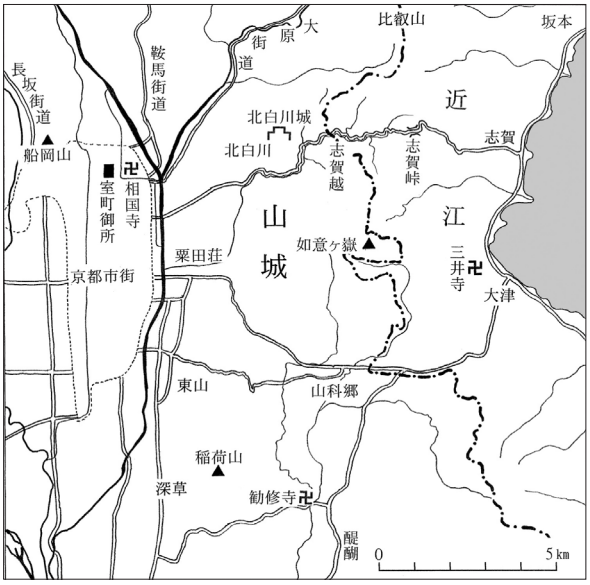

図５　応仁の乱における武田軍の主な交戦地（京都周辺）
（河村昭一『若狭武田氏と家臣団』57 頁より転載）

応仁の乱のときに武田は北白川というところに城を築くよう命じられます。北白川はここです（**図５**）。私は、ここは前々から武田が拠点にしていたのではないかと思っています。北白川は琵琶湖と京都を結ぶ志賀越にあり、琵琶湖西岸の道を通って若狭につながっています。また、近くの大原街道や鞍馬街道も若狭につながっています。ここは京都と若狭をつなぐ重要な場所なんですね。それから、この志賀越から京都の町に入る「今道の下口」というところに関所がありました（**13 頁図９**）。この関所は北白川の足軽が管理していて、その北白川の足軽というのは武田の配下になっていました。つまり、琵琶湖から京都の町までのルートは武田が押さえていたということになります。

（4）明応の政変と武田氏

その後、明応２年（1493）に管領（かんれい）の細川政元（まさもと）が現職の将軍足利義材（よしき）を引きずり降ろして新しい将軍を立てます。義材は系図でいうと⑩です（**図６**）。義稙（よしたね）ははじめ義材という名前でした。この義材を引きずり降ろして、左にいる義澄（よしずみ）を新しい将軍に立てたというクーデターです。二人はいとこ同士ですね。これを明応の政変といいます。引きずり降ろされた前将軍の義材は、幽閉されていた政元の家臣の屋敷から嵐の夜にこっそり抜け出して越中に逃げます。越中では神保長誠（じんぼながのぶ）という人が力を持っていました。そこに身を寄せてリベンジを誓うのです。なかなか根性のある男で、あとで実際に将軍に復帰します。

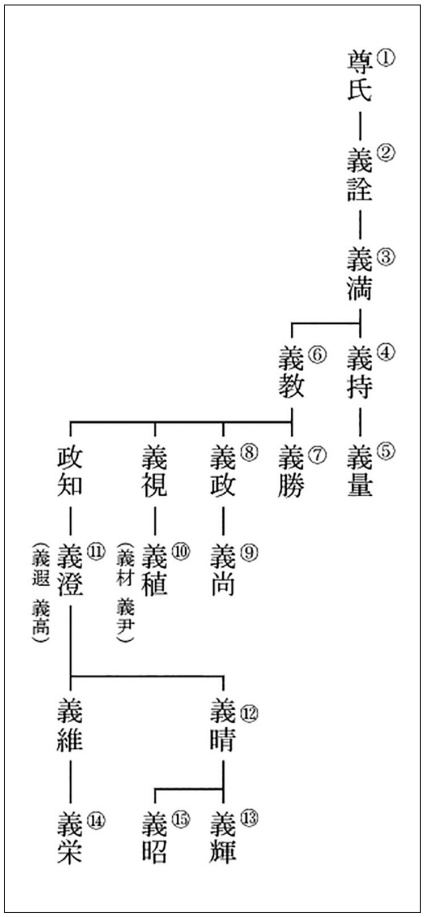

図６　足利氏系図
（①～⑮は将軍就任順）

将軍が替わって大名たちはどうしたかというと、大内なんかは、はじめから政元と対立していますので、国元に帰ってしまって反細川の態度を明らかにします。他の大名たちの多くは、迷いながらも表向きは細川方につきました。武田も、政元が主催する犬追物（いぬおうもの）に参加して政元派を表明しています。ところが、裏ではどうも越中の義材と連絡をとっているらしいということがわかりました。元信は越中に使いを送って、「義材様が京都に上られるときには、どうぞ若狭の武士を連れて行ってください、お役に立ちますから」と申し入れています。実際に逸見民部丞という武田の家臣が越中にいて、京都と連絡をとっているということもわかっています。表向きは細川方についているようなフリをしておいて、実は裏で越中の義材と連絡をとっている。二股をかけてるんですね。これはなにも武田だけではありません。同じようなことをしていた大名は他にもいました。ただ、翌年（明応３年）８月に、義材から「近いうちに若狭に行くので、そのときは協力してくれ」という連絡が入ると、元信はそれを細川にバラしてしまいます。武田はここで義材を見限って、細川方に転向したといえると思います。

（5）元信の栄達と在地での矛盾

なかなか冷静で賢明な立ち回りをする元信ですけれども、非常に上昇志向の強い男だったようです。文亀元年（1501）に朝廷から従四位下（じゅしいのげ）という位をもらいます。元信は一つ下の五位の位も持っていませんでしたので、これは当然、将軍義澄の強い推薦があったはずです。

その次の年には即位段銭（たんせん）という税金がかけられました。天皇の即位の儀式のために莫大なお金が必要なんですね。その費用を賄うための臨時税です。それで、武田氏では段銭を集めるために武田政明という人が親子で若狭に下ったのですが、その政明親子が現地で殺されてしまうという非常にショッキングな事件が起きます。誰に殺されたかというと、「国衆ならびに百姓」です（**資料３**）。

資料３　『実隆公記』文亀２年６月20日条

後に聞く。今日若狭小浜に於いて武田中務大輔（政明）・同子息弥五郎等討死と云々。国衆ならびに百姓等責め来たりてかくの如しと云々。不便々々。段銭以下苛政の致すところと云々。後の人慎むべきもの乎。

百姓はわかりますけれども、国衆というのは武士です。まさか武田の家臣ではないと思いますが、武士と百姓が一緒になって政明親子を殺した。なぜ殺したかというと、「段銭以下苛政の致すところ」、段銭に反発したというのはわかりますが、私はこの「以下苛政」というところに注目したいと思います。段銭だけじゃないんですね。段銭だけでも頭にきたと思いますが、以前からの「苛政」、武田の苛烈な政治そのものに対する反発があった。しかもそれが、百姓だけじゃなくて武士にもあった。段銭をきっかけに国内の不満が爆発したんだと思います。

元信は、その事件が起きた３か月後に相伴衆という地位に就きます。相伴衆というのは、この当時は非常に限られた人にしか認められませんでした。守護大名にとっては最高の名誉です。これも将軍義澄がそうしたんですね。管領の細川政元はこれに大反対でした。「なんで武田なんかを相伴衆にしないといかんのだ」と反対するのですが、義澄は反対を押し切って任命します。政元は専制的なところがあって、なんでもかんでも自分でやってしまうんです。義澄からすると、「将軍はおれなのになんで政元がやってしまうんだ」ということで義澄と政元との間には微妙な溝がありました。よく対立していたといわれています。義澄としては、政元に代わる強力な与党がほしかった。それで、元信をかわいがって「従四位下をやる、相伴衆にしてやる」と言ったのではないかと思います。

政元は「即位式なんかやらんでもいい」、そういうことを平気で言う男なんです。ですから、他の守護も真面目に段銭を集めようとしない。そういう中で、武田は一生懸命、将軍のために即位段銭を集める。でも、それが結果として、こういう事件を招くことになった。しかも在地の諸階層から強烈な反発を受けた。こうなってくると、遠い京都に居てそこから若狭を支配するというのは限界がある。大名として脱皮しなくてはいけない、そういう段階になった。若狭武田氏は、これを機に戦国大名化していくのではないかと思います。

２．戦国大名武田氏

（１）永正の丹後侵攻

先ほど、応仁の乱のところで丹後に攻め込んだというお話をしました。武田は一色に敗れて追い出されたあと、反撃して丹後の一部を占領しましたが、結局は丹後の守護職を返上しなくてはならなくなりましたね。なんとか丹後がほしい武田は、ずっと機会をうかがっていました。そこにチャンスが訪れます。

文亀３年（1503）に丹後で国を仕切っていた守護代の延永と有力国人石川の２人が武力衝突を起こします。丹後の国内が大混乱に陥って、一色氏の大名としての権威は地に落ちる。それを見ていた武田は、これはチャンスだということで、次の年の12月に京都から若狭に下ります。このときは

まだ準備です。次の年もまだ行動を起こすまでには至りませんでした。そして永正３年の４月です。いよいよ行動を起こします。資料をご覧ください(**資料４**)。これは元信が中山寺に納めた願文(がんもん)です。中山寺は当時、一乗寺といっていました。

資料４　武田元信願文（『福井県史』資料編９　中山寺文書 19）

祈念し奉(たてまつ)る願文(がんもん)の事

右意趣は、永正三年初夏後二日（4 月 22 日）寅刻(とらのこく)（午前 4 時）の霊夢、則ち観世音納受の瑞想也（観音様が願いを聞き入れてくださるというめでたいしるしだ）。信ずべしと云々。是則ち大悲の軍力を以て本意を達すべきの基(もとい)也。しかして、敵眼前に亡び、丹後国泰平に属さば、土民寄附せしめ、当山本堂造営、発起せしむべきもの也。仍(よ)って願書件(くだん)の如(ごと)し。

永正三年卯月廿二日

大膳大夫源朝臣元信（花押）

4 月 22 日の明け方に夢を見た。文書の日付は 22 日ですので、この願文を書いた当日のことです。その夢に観音様が現れて、お前を助けてやるといってくださった。夢のお告げを信じて今から兵を出す。それで丹後を攻め獲ることができたら、民衆たちは（土地や米銭を）寄付し、（自分は）本堂造営を発願する、と言っています。

ただ、自分だけでは自信がないので、細川政元に援軍を頼みます。政元は頼みを聞き入れて養子の澄之(すみゆき)と一族の政賢(まさかた)に 22 騎 2000 人を付けて丹後に下しますが、この時点ではまだ、幕府から出兵の正式な許可を得ていません。見切り発車です。幕府の許可は、6 月になってようやく下ります。幕府の許可が下りたということは、丹後の守護職を幕府から認められたということになると思います。念願の丹後守護に返り咲いたということで、武田は張り切って戦をするんですが、負けに負けます。なぜこんなに負けるのかよくわかりませんが、8 月には数百人が討たれたといわれています。

武田勢・細川勢はこの年は丹後で年を越して、4 月になると、少しややこしいのですが、京都にいた細川政元が東北地方に行くといって旅に出る、その途中で若狭にやって来ます。なぜ、丹後で自分の兵が戦争をしているこんな時に旅なんかに出たのかというと、政元は修験道(しゅげんどう)に凝っていましたので、どうも霊場巡りに出かけたのではないかと思います。それで若狭までやって来るのですが、周りは反対する一方、武田からは「いいところに来てくれた。ぜひ丹後で手助けをして欲しい」と頼まれます。それで政元は東北行きをやめて丹後に行きます。政元は京都から「はよ帰れ」と矢の催促を受けながら、しばらくは丹後の陣にいました。それでも一色に負け続けます。政元はいよいよ戻らないといけないということになって、永正４年５月に京都に戻るのですが、戻った途端に暗殺されてしまいます。丹後の細川勢、武田勢も大敗して、丹後ではどうも勝ち目がないということで、引き上げます。武田は丹後に攻め込んだけれど、結局なんにもならなかったんですね。

（2）細川京兆家・将軍権力の分裂と武田氏

次は、先ほど少し触れました細川氏です。系図をご覧ください（**図 7**）。二重線は養子です。政元の子供は 3 人とも養子ですね。先ほどお話ししたように政元は修験道に凝っていましたので、生涯独身でした。実の子はいません。それでは困るということで、一番上の澄之（すみゆき）は関白九条家から、二番目の高国は阿波の細川家から、三番目の澄元（すみもと）は分家の野州（やしゅう）家から、そうやってあちこちから養子を迎えているんですね。ところがこの 3 人は、実の兄弟でもなんでもないので仲が悪い。政元のことも、実の父ではないので親とも思っていない。それで、家臣もそれぞれの養子に付いて三つに分裂してしまうんです。

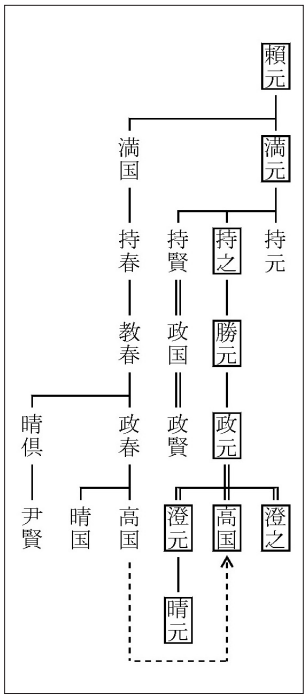

図 7　細川氏系図
（文字囲は管領）

分裂して最初の出来事が、先ほどの政元の暗殺です。暗殺したのは一番上の養子の澄之側です。これより先、足利義尹（よしただ）（義材）が明応 7 年（1498）の 9 月に越中から越前の朝倉のところに来ています。義尹は朝倉に協力して欲しいのですが、朝倉からはなかなか積極的な協力が得られません。それでしびれを切らして一乗谷から出て行って、次の年の 11 月に京都に攻め込もうと行動を起こします。これは京都の目の前、近江の坂本で敗れてしまって、最終的には周防の大内を頼って山口に下っていきます。政元が暗殺されたのはそのあとで、ついで政元を暗殺して家督に就いていた澄之を高国が討ち果たす。そして先に家督に就いていた澄元が復帰します。この細川の混乱を山口から見ていた義尹は行動を起こします。

大内軍が瀬戸内海を進んで来ると、中国地方や九州地方からどんどん武士が集まってきます。困ったのは安芸武田氏です。周りはみんな大内軍に加わっていく。この間まで大内と喧嘩していたわけですから、安芸の武田も迷っていたのですが、結局、大内軍に加わり、結果的に若狭の本家と袂を分かつことになります。当時の安芸武田の当主は元繁（もとしげ）という人でした。本家と敵味方同士になるんですから、当然迷ったと思いますが、決断したんですね。見方を変えれば、ここで安芸武田氏は本家から独立したという言い方もできると思います。

永正 5 年（1508）になると、京都にいる将軍義澄は、これは大変だということで各地の大名に義尹の上洛を阻止するよう命じます。こうして、全国の大名が義尹派と義澄派で真っ二つに分かれることになります。このとき、丹後の一色は義澄の命令を受けています。つまり、一色は丹後の守護として認められた、言い換えますと武田の丹後守護職はパーになったということです。若狭武田氏は安芸の武田家と分裂しただけでなく、丹後の守護職も失ってしまいました。

4 月には細川高国が義尹派に寝返ったため、将軍義澄と細川澄元は近江に逃げ出します。そして高国は堺に上陸した義尹から当主として家督を認められます。ずる賢いといえばずる賢いですが、戦国時代を生き抜くためには、こういうことも必要だったのでしょう。義尹は 6 月に京都に入って、7 月、将軍に復帰します。不屈の執念が実り、15 年かけて目的を達したというわけです。

細川家と将軍権力の分裂で、若狭武田氏と安芸武田氏も敵味方に分かれることになりました。若

狭の元信は、先ほど触れましたように、義澄からあれだけ世話になっていました。義澄から特別な厚遇を受けた関係で、義澄側についた。安芸の元繁は、大内との対立関係を飲み込み、周囲の大勢に従って義尹側についた。その結果、本家の若狭武田氏と敵対関係になったというわけです。

それから３年後の永正８年３月に、義澄は京都を奪還しようと行動を起こします。若狭の本郷政泰に「今から京都に行くから」と言って、上洛を求めます。文書は残っておりませんけれども、おそらく若狭の武田元信にも協力を求めているはずです。義澄は京都に入る寸前に近江で亡くなってしまうのですが、細川澄元は委細構わず京都に突っ込みます。そして京都の船岡山というところで細川高国・大内勢と戦います。この戦いは高国・大内勢が勝って、負けた澄元は分国の四国阿波に逃げて行きます。このとき武田はどうしていたかというと、どうもこの船岡山の合戦には参加していなかったのではないかと思います。ただし、義澄方の立場は堅持していました。しかしその後、翌年の永正９年８月には元信の子供の彦四郎が義尹と対面を果たしていますので、これまでに新政権に帰順したようです。

（３）逸見氏の謀叛と丹後再侵攻

こうして若狭武田氏と安芸武田氏の敵対関係は解消されましたが、今度は若狭武田氏の家臣の逸見氏が謀反を起こします。逸見氏というのは高浜にいた有力な家臣です。それが３度にわたって武田に弓を引きます。

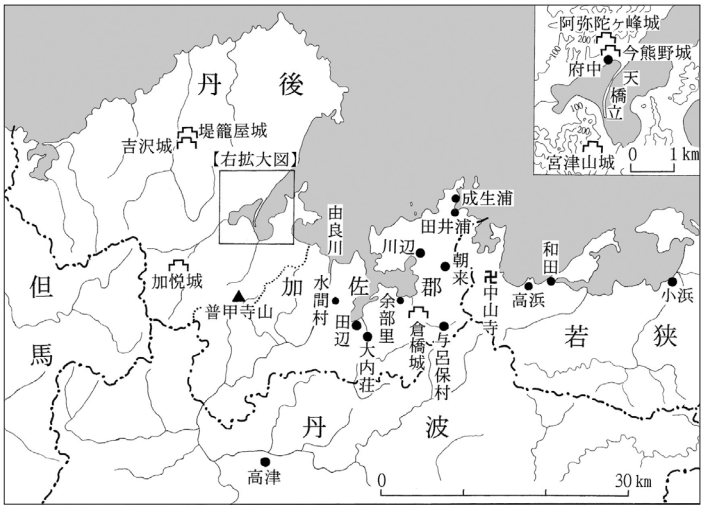

図８　丹後国要図（武田軍侵攻関係）
（河村昭一『若狭武田氏と家臣団』96 頁より転載）

最初の謀反は永正 14 年（1517）でした。永正 10 年に丹後でまた内輪もめが起きます。一色の家督を巡って、延永と石川が対立します。再び丹後が混乱に陥るんですね。その中で、どうも石川が武田を頼ったようです。おそらく、敗れた石川が若狭に逃げ込んだのでしょう。それを延永が追いかけて若狭に入り込んでくる。その時に逸見が武田に謀反を起こして、延永方に付いたのではないかと思います。

危険を感じた武田は、幕府を通して朝倉に援軍を頼んだようです。朝倉は幕府の命令に応じて援軍を送ってきます。そして８月に丹後に攻め込んで倉橋城という城を落とします。図をご覧ください（**図８**）。倉橋城は加佐郡、いまの舞鶴市にある重要な城でした。倉橋城を攻略したのは朝倉ですが、武田も頑張りまして堤籠屋（つつみごや）城、吉沢（よっさわ）城と攻め込んで行きます。この時は丹後半島のあたりまで攻め込んで行きましたが、最終的には加佐郡だけ占領することに成功しました。ただ、これは朝倉氏の支援がなければ実現していません。やっとの思いで加佐郡の１郡だけ獲得した、そういう戦争でした。

（4）武田氏の戦国大名化

先ほどお話ししたように若狭武田氏は、京都にいたのでは駄目だ、しっかり国元に腰を下ろして支配しないといけないと考えるようになりました。戦国大名化ですね。その分かりやすい目安の一つが、在京をやめて在国にするということです。

武田の場合は、なかなか珍しい例なんですけれども、京都を引き上げた時期が分かっています。こちらの資料です。

資料５『宣胤卿記』永正４年７月25日条

申刻（午後４時）佐々木四郎（六角、去年より在京）俄に国に落ち下る。彼の在所（土御門と鷹司の間烏丸西東頬、武田氏在所也）に甲乙人（一般人）打ち入り、雑物を取る。言語道断の式也。

武田は永正元年（1504）から京都の屋形を留守にしていて、永正３年から近江の六角に貸していたようです。これは六角が借りていたときの話で、六角が近江に戻ったすきに暴徒が乗りこんできて、中にある家財道具を略奪したというものなのですが、ここに武田の屋敷があった場所も書いてあります。小さい字で「土御門と鷹司の間烏丸西東頬」とありますね。こちらの図（**図９**）でいうと、まん中あたりにお寺のマークがあって「浄花院」と書いてある「院」のあたり、そこが武田の家でした。このあと、武田が京都に上ってきて滞在したという記録はありません。ですので、私はこれを最後に京都の屋形を引き払ったと考えています。

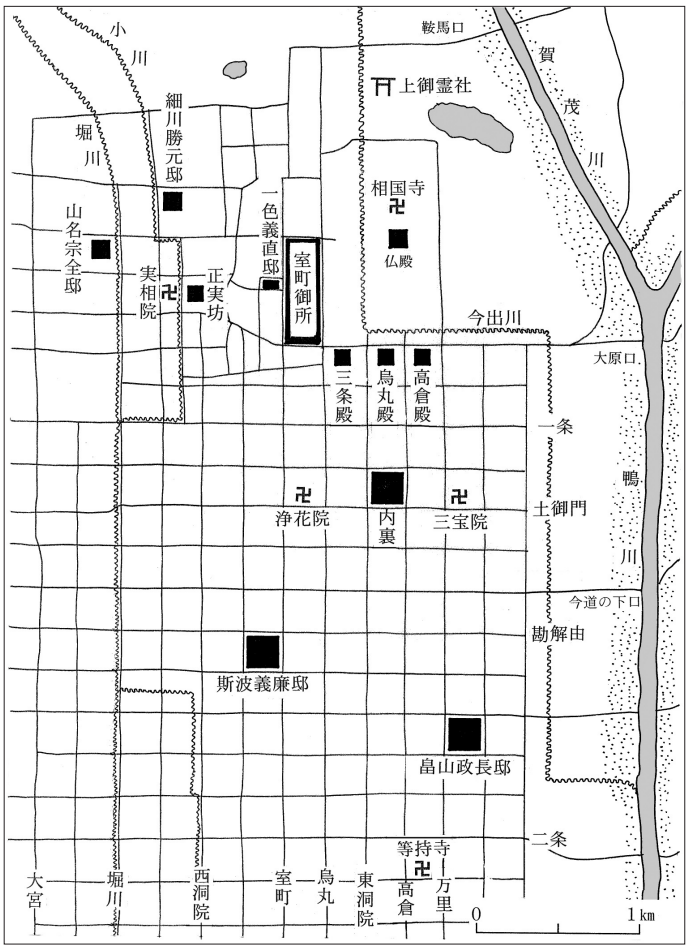

図９　応仁の乱における武田軍の主な交戦地（京都市街）
（河村昭一『若狭武田氏と家臣団』48頁より転載）

武田は永正元年に丹後侵攻の準備のために京都から若狭に下りました。そのあと京都の屋形を使用しないでいたため、六角が借用して住むようになった。そして武田は丹後に攻め込んだけど、結局だめだった。その失敗で、京都の屋形を処分して、本格的な在国に転じたのだと思います。

図10　後瀬山城と居館跡
（河村昭一『若狭武田氏と家臣団』119頁より転載）

若狭で拠点になる後瀬山城の築城は大永2年（1521）のことですが、武田は城を築く前に守護所を移しています。年はわかりませんが、まず守護所を西津から小浜に移しておいて、それから大永2年に、長源寺というお寺を立ち退かせてそこに居館を構えた。そして後ろの山に本格的な山城を築きました（**図10**）。だんだん戦国大名らしくなってきましたね。

ちなみにこの後瀬山城の標高は168メートルです。最初にご覧いただいた広島の武田山（金山城、**写真1**）は400メートル、朝倉の一乗谷城も470メートルほどです。比較するとちょっと見劣りしますけれども、小浜に城を築くとしたら、地理的にはここしかありませんでした。

表2は武田氏が発給した文書を、幕府から下りてきた命令を下に下した文書と、武田氏当主の命令を下した文書に分けて整理したものです。幕府の命令を下に下した文書は信賢の代にしかないんです。文書の残り方の問題もあるでしょうけれども、残っていないということも重要な事実です。幕府から守護、守護から守護代と下りてくる昔からの伝統的な命令系統が、信賢の代でぷっつり切れるように見えるわけです。

当主の命令を下した文書を、当主自身が署名して出す直状（じきじょう）と、家臣が当主に代わって出す奉書の二つに分けて見てみると、信賢は圧倒的に奉書が多い。国信も奉書のほうが多いですが、元信からあとは直状が多くなります。当主の命令が前面に出されて下に下りていく、そういう傾向が強まっていったということでしょう。

武田氏は、元信の代の終わり頃から次の元光の代にかけて戦国大名らしくなってきた。ここで守護大名から戦国大名に転換したということになりますね。

表2　武田氏当主・家臣発給文書の形式（若狭関係のみ）

文書形式＼当主	幕命の下達					当主の命の下達								合計
	遵行状	奉行人奉書			小計	直状	寺社領安堵状	奉行人(家臣)奉書					小計	
		単署	連署	小計				単署	内袖判	連署	内袖判	小計		
信賢	5	4	12	16	21	4		3		20	1	23	27	48
国信						2		2		3		5	7	7
元信						18	3	5		8	1	13	31	31
元光						41	10	14	9	1		15	56	56
信豊						33	7	16	8	2		18	51	51
義統						16	4	2	1	2		4	20	20

注 (1)遵行状（じゅんぎょうじょう）：守護が幕府の命令を守護代に、守護代が守護の命令を小守護代（こしゅごだい）や守護使にそれぞれ伝える文書。
(2)直状（じきじょう）（差出人本人が署判する文書）には書状（私的内容で年紀は記さないことが多く「恐々謹言」などで結ぶ文書）は含めていない。
(3)寺社領安堵状には寺社領全体の諸役免除を内容とする判物（はんもつ）（公的内容の直状で「状如件」で結ぶことが多い）も含めた。

（5）粟屋氏の強勢と元隆の失脚

大永7年（1527）の2月に桂川合戦がありました。これは細川高国の依頼で武田が京都に兵を出したのですが、大負けに負けたという戦いです。このときの武田の兵は2000で、そのうちの500、全

体の4分の1が粟屋氏の兵でした。粟屋氏というのは、武田の家臣団の中で一番大きな力を持っていた家臣です。この数字からも、力の大きさがうかがえると思います。

同じ年の11月に今度は粟屋元隆（もとたか）が単独で兵を出します。これは高国の求めに応じて出したものなんですが、今度は800です。これには京都の人もびっくりして「武勇の専一者歟（か）」（『二水記（にすいき）』大永7年11月3日条）、「一番の武勇の者ではなかろうか」と言っています。

武田氏は、数少ない高国党として参戦した桂川合戦で非常に大きな被害を受けました。武田家中最大の勢力を誇る粟屋氏も多くの犠牲を出しましたが、その9か月後に今度は一族だけの大軍で再上洛して軍事力と高国との緊密ぶりを内外に見せつけた、この粟屋氏の行動の中に、のちに粟屋元隆が失脚する要素があるのではないかと思います。

翌年の享禄元年（1528）に高国と足利義晴は近江の坂本に逃れます。そこから義晴は朽木、高国は伊勢に下るのですが、粟屋の一族に勝春という人がいて、その勝春がこっそり伊勢まで下っているんです。勝春は粟屋元隆のいとこにあたる人です。これは、おそらく武田には内緒の隠密行動だと思います。なぜかといいますと、高国は武田と距離を置いていたんですね。高国が協力を期待したのは六角であり、越前の朝倉であり、出雲の尼子であり、備前の浦上であって、若狭の武田はあんまり当てにしていませんでした。どうも高国は、武田氏とそういつまでも密接なつながりを持とうとはしていなかったようです。そういう中で、粟屋は必死に高国を応援するんですね。

勝春は一生懸命高国の味方をして単独行動をしますが、高国は享禄4年（1532）の6月に大坂の天王寺合戦で敗れて自害します。それでも勝春は、高国の跡を継いだ弟の晴国と一緒に行動します。武田はどうしたかといいますと、天文3年（1534）の7月に元光が足利義晴に太刀と馬を贈っています。義晴が身を寄せていた六角のところから近江坂本に移って、これから京都に乗り込もうという時のことです。この頃、義晴を応援しているのは細川晴元です。それで武田もこっちにつくんです。勝春は反晴元、旧高国党ですので、晴元派と反晴元派で武田と粟屋が分裂しちゃってるんですね。

桂川合戦のあとで、武田氏は高国と距離を置くようになったのだと思います。それに対して、粟屋氏は一層関係を深め、武田氏が明確に晴元派に転じたあとも、勝春は依然として旧高国党の盟主晴国に仕えた。こういう動きをしていたものですから、武田としては非常に困るわけです。しかも非常に大きな力を持っている。それで武田は粟屋を危険視するようになったのではないかと思います。

同じ頃、武田氏では家督相続が問題になっていました。元光は早くから信豊を跡継ぎにしたかったようです。元光は天文元年（1532）の冬に出家しています。普通は出家したら息子が跡を継ぐのですが、息子の信豊はなかなか跡を継げない。跡を継げたのは、6年後の天文7年のことです。これだけ長い時間がかかったということは、家中に信豊の家督相続に反対する勢力がいたということです。おそらく、長男は信豊ではなくて信孝、いろいろ説がある謎の人物なんですが、この人が長男だったのではないかと思います。それで意見が分かれて、なかなか跡継ぎが決まらなかったのだと思います。それから、これにはもう一つ、どうも信豊は当主としてはふさわしくない、そういう家臣の見立てもあったのではないかと思います。これは信豊の施策を見ると何となくうなずけます。

この点はあとで触れます。

信豊が跡を継いだ天文７年に、絶頂を極めていた粟屋元隆が突然、丹後の加佐郡に出奔します。直接の契機はわかりませんが、通説では「元隆が信豊の家督相続に反対して信孝を擁立し、領国支配権を奪取しようとした反乱」というふうに理解されています。信孝を支持する勢力が、元隆と連携を図った可能性はあります。しかも、元隆が名田荘（なたのしょう）に再入国した時に信孝と連携したことも事実ですので、確かにそういう面もあるかもしれません。ですが、これは元隆のほうから起こしたアクションではなくて、武田氏が元隆を追い詰めて追放した、こういうふうに見たほうがいいのではないかと思います。武田氏にとって元隆は危険分子なわけですから、追い出したかったのではないかと思います。

（６）信豊の施策

先ほど、元光が跡を継がせようとした信豊は当主としてふさわしくないという見立てがあったというお話をしました。その例をいくつかご紹介します。信豊は天文 11 年に「千石頼母子（せんごくたのもし）」という頼母子講を始めています。頼母子講というのは米や銭を持ち寄って、それをみんなで順繰りに受け取っていき、参加者すべてが受け取るまで続けるもので、信豊はこれを家臣の給与に充てようとしたのですが、始めて２年で打ち切ってしまいます。２年で終わるというのは、だまし討ちのようなものです。それから、丹後田辺の代官を小浜に呼びつけておいて、帰る途中で殺してしまう。それで丹後で反乱が起きて鎮圧に苦労する。なんでこんなことをしたんでしょうか。

天文 10 年（1541）に安芸の金山城が大内方の毛利氏に攻められて落城します。これで安芸武田氏は滅亡するんですが、信豊は、安芸の支配を復活させようと、天文 14 年に大内のライバル尼子氏に協力を要請します。このときはあっさり断られますが、７年後の天文 21 年になって尼子が協力に応じると、安芸に門徒が多い一向宗の力を借りて大内と戦えば勝てるんじゃないかということで、本願寺に協力を要請します。今度は本願寺に断られます。こんなことをやっていて、とても成功するとは思えません。若狭のリーダーとしては失格だろうと思います。

（７）武田氏の衰亡

弘治２年（1556）には、信豊が息子の義統（よしむね）と対立します。原因はおそらく、長男の義統を差し置いて次男の信由（のぶよし）に跡を継がせようとしたことではないかと思います。この父子対立は長引き、永禄元年(1558)７月、義統は小浜からおそらく高浜へ移り、信豊は近江に出てしまいます。義統は翌月小浜に帰りますが、信豊は近江に留まったままで、両者の対立は抜き差しならない状態になります。このとき信豊を支えていたのは、どうも、三方郡の武士だったようです。

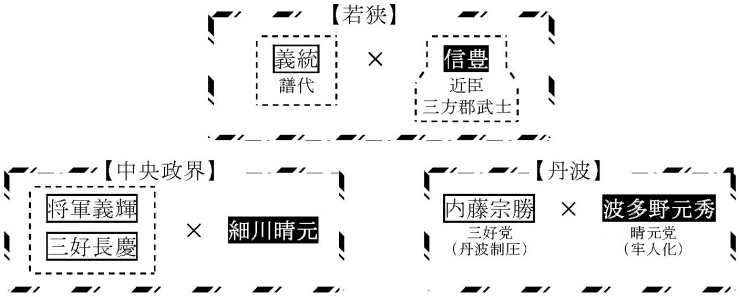

図 11　永禄初年ころの畿内近国の政治構図と武田氏

三方郡の諸氏は、病気だとか用があるとか言って小浜に出仕しないんですね。

私は、この信豊と息子義統の対立というのはどうも、中央政界とつながっているのではないかと思います。図をご覧ください（**図11**）。信豊は細川晴元と仲がいい。義統も、最初は晴元と仲が良かったのですが、途中で晴元を見限って三好につきます。このような形で、信豊と義統の対立はそのまま中央政界の対立関係とリンクしていたのではないかと思います。

その後、永禄3年（1560）の冬に、先ほど出てきた逸見氏が3回目の反乱を起こします（2回目は粟屋元隆失脚のとき庶家が同調）。このときは逸見に隣の丹波から蓬雲軒宗勝（図11の内藤宗勝）という助っ人が現れ、若狭に入り込んできて武田義統と戦います。義統は朝倉に泣きついて兵を送ってもらって、それでなんとか逸見を押さえ込みます。逸見は8月に降伏しますが、謀反ですから打ち首にすればいいのに、義統は助けるんです。朝倉氏の援軍がなければ、反乱の鎮圧は不可能でした。朝倉氏に助けてもらって、ようやく逸見の反乱を抑えることができました。永正14年の丹後再侵攻のときも朝倉氏に助けてもらって、ようやく加佐郡を占領できました。反逆者の逸見の帰降も許さざるを得ない。武田氏の権威が失墜してしまっているということがよくわかると思います。なお、信豊は永禄4年4月に義統と和睦して若狭にもどり、隠居します。

義統には孫犬丸（のちの元明）という息子がいました。永禄9年（1566）に、5歳になるその孫犬丸を担いだ反乱が起きます。反乱を起こしたのは、おそらく三方郡の武士だと思います。三方郡で一番力を持っていた佐柿の粟屋勝長、この勝長が中心にいたのではないかと思います。

反乱が鎮まったあと、永禄10年の4月に義統が亡くなってしまいます。残された孫犬丸を当主に立てて盛り立てていかなくてはならないということになりましたが、次の年に若狭武田氏は終わりを迎えます。永禄11年に朝倉がやってきて、7歳になる孫犬丸を越前に連れて行ってしまいます。なぜ朝倉が孫犬丸を越前に連れて行ったのか。朝倉氏の構想は、武田の家臣たちが孫犬丸を担いで反朝倉に転じる芽を摘んでおきたかった。今のところは朝倉と戦争する気はないようだけど、いつ何時、朝倉と対立することになるかわからない。その時に孫犬丸が担がれるということがないように、その芽を摘んでおきたいということです。若狭に置いていたのでは危ない。一乗谷に連れて来てそこで育て、成人した暁に、朝倉氏がコントロールできる国主として若狭に戻す。そして、若狭を事実上の朝倉領国にする。そういうことを考えていたのではないかと思います。

こうして孫犬丸が越前に連れて行かれたことによって、武田氏の戦国大名としての歴史は終わります。若狭にやってきてから128年が経っていました。

おわりに　ー武田氏はなぜ強力な戦国大名に成長できなかったのかー

なぜ、武田氏はこんな結末を迎えることになったのか。その答えになるかわかりませんが、まとめると①一色勢力の根強い残存（特に応仁以前）、②補佐する有力一族の不在（朝倉氏には光玖、宗滴がいた）、③丹後加佐郡の重荷（本国も治め切れない武田氏には占領地の統治は無理）、④信豊の資質（詐欺まがいの千石頼母子や安芸奪回の夢想）、⑤支配体制の問題（行政組織を整備した朝倉氏と違い当主の権威による支配を志向）、これらが要因としてあったのではないかと思います。

ご清聴ありがとうございました。

注

1）河村昭一「安芸武田氏関係文書目録」(1)（2）(『芸備地方史研究』108 号・109 号、1976 年)。

2）広島市祇園公民館。

3）河村昭一『郷土資料　安芸武田氏』(広島市祇園公民館、1984 年)。のちに改訂版が『安芸武田氏』(中世武士選書 2、戎光祥出版、2010 年）として復刊。

4）河村昭一『若狭武田氏と家臣団』(戎光祥出版、2021 年)。

5）函名と文書番号は京都府立総合資料館編『東寺百合文書目録』第 1（吉川弘文館、1976 年）による。

6）「天陰語録」(『続群書類従』第 13 輯上　文筆部)。

〔付記〕本稿は 2021 年（令和 3）10 月 31 日に、福井県立図書館多目的ホールで行なわれた講演会「若狭武田氏の興亡一三〇年」の講演録を加筆・修正したものです。